

「縛られたプロメテウス」(アイスキュロス)

全宇宙の主たる大神ゼウスは父クロノスを逐つて王座に即くや、他の神々に諸々の特権を分ち與へる一方、「あたみじめな人間どものことは氣にもとどめず、それどころかこの種族をすべて破滅させ」ようとさへ考へ、神々もそれに異を唱へようとはしない。然るにプロメテウスのみは自ら神の身でありながら甚く人間を愛し且つ哀れみ、神々の特權的**所有物**たる火を盗んで人間に齎したばかりか、「子供じみて愚かであつた」人間達に「思慮を授け、智慧を持たせ」、生活の爲の様々な技術や病苦を和らげる醫藥をも與へたのであつた。

怒つたゼウスは神々に命じて、僻遠の地の海に臨む斷崖にプロメテウスを縛りつけさせる。「神々の忿怒を恐れもせず、人間どもに不相應な恵みを授けた」罰として、眠る事も膝を折り曲げる事も許さず、未來永劫、「非情の巖で物見の役を務め」ねばならぬといふのだ。

だが、プロメテウスは責苦に苛まれながらも甚だ意氣軒昂で、己が行爲を誇り、ゼウスへの

反抗心を隠さうともしない。彼の舅しゅうとの海神オーケアノスやその娘達が訪れて彼を慰め、ゼウスの怒りを鎮めよと勧めても、一向に聞入れようとしなない。それ處か、「定められた運命からは、ゼウスといへども逃れられない」と云ひ放ち、ゼウスの没落の運命を仄めかして、己れが「不法の縛めと苦難」から解放される未來の可能性すら口にする。

次いでアルゴス王の娘イーオーが牝牛の姿で登場する。「神の身ながら人間の娘と」無理やり「情を交さうとし」た夫のゼウスに嫉妬した妻ヘーラーによつて、そんな姿にされて諸國を彷徨さまよつてゐるのだ。プロメテウスはイーオーの理不盡な苦難を憐れみ、ゼウスの「無法」を詰り、孰いづれ没落するゼウスなど俺は齒牙にもかけぬと叫んで、ゼウスへの敵愾てまがい心を露あらはにする。

そこにゼウスの息子ヘルメスがやつて来て、父ゼウスの運命について知る處を全て明らかにせよと迫る。プロメテウスは拒絶する。破滅する事になるぞとヘルメスが恫喝すると、プロメテウスは叫ぶ、いいか、間違つても思ふなよ、俺がこの縛いましめを解いて欲しい餘りに「ゼウスの思惑を恐れて女々しい氣持」になるなどと、そんな事は斷じて無い。ヘルメスは説得を斷念するが、ゼウスの怒りは愈々いよいよ烈しく、稻妻とどろきが轟とどろき、プロメテウスはこの「不法の仕打ち」の有様を見よ、と叫びつつ奈落ならくの底に顛落てんらくして行く。

至高の正義神ゼウスへの敬神の念の篤かつたアイスキュロスがかくも非道な暴君ゼウスを描いた意圖について、確實な事は何一つ分らないといふ。何しろこの作品は三部作中の一作に過ぎぬといふし、しかも他の二作は殆ど傳はつてゐないのだ。だが、ゼウスの描き方についての作者の意圖はさて置き、イーオーの悲惨が如實に物語つてゐる様に、人間が測り知れぬ神意に翻弄される許りの極めて哀れな存在でしかないと作者が信じてゐた事は明らかであり、亦一方、ニーチェの「悲劇の誕生」に従へば、作者はプロメテウスを通して「人類が與り得る最上最高のものを人類は傲慢によつて獲得し、かくして今やその報いを、すなはち、苦惱と苦難の全洪水をその身に負はねばならない」（鹽屋竹男譯）とする、人類の「能動性の榮光」及び「能動的な罪」に纏はる、己が「昂然たる信念」を披瀝してゐた事になる。これを要するに、アイスキュロスは「人の身」の卑小と飽迄謙虚に向き合ふ一方、「ヒュプリス（傲慢）」の權化とも云ふべき優れて「能動的」な英雄像を描いて憚らなかつた譯であり、かかる謙虚と傲慢の共在は西洋精神について頗る多くの事を語つてゐる様に思ふ。

（伊藤照夫譯、「ギリシア悲劇全集2」、岩波書店）